学園長だより 第37回

君に読む未来

愛知淑徳学園理事長・学園長
小林素文

大学の一号棟が生まれ変わりました。一号棟は、愛知淑徳大学の開学に向け昭和四九年に竣工し、以来五〇年近く大学の発展に寄与し、その役割は新しい一号棟に託されました。

＊

学園の悲願であった四年制大学設立は、昭和四〇年学園創立六〇周年後の理事会で「十年後に四年制大学を設立する」と決議したことに始まります。

その二年後、星が丘キャンパスに近いこと、十分な面積を有すること、を条件に見つけ出されたのが現在の長久手キャンパスです。しかし、当時は、今では考えられない山林・原野のままの未開発状態でした。

文学部国文学科・英文学科設立に必要な教育体制及び校舎の設計を整え、昭和四九年六月、「愛知淑徳大学設立認可申請書」を文部省に提出しました。

しかし、長久手校地の調整地域、砂防地域の解除に手間取り、校舎の地鎮祭が行われたのは、その年の七月二日のこと。同年の一〇月末に行われる実地審査に間に合わせるべく、何としても校舎を完成させなくてはなりません。

今では考えられない、昼夜兼行、土日もない突貫工事で、一〇三日の驚異的スピードで四階建ての校舎を完成させ、実地審査に何とか間に合わせたのです。

校舎だけでなく教員の差し替えなどの困難をも乗り越え、四年制大学実現の知らせを受けた時の喜びを、当時の理事長小林素三郎氏は次のように述べています。

「一二月一二日文部省で行われた審議会の結果を聞きに私と事務局長が上京し認可の答申が出たことを聞かされ、直ちに帰名し関係教職員と料亭で祝杯をあげた。それまでの苦労を思い、酔うにつれ皆涙をして喜び合った。」（『愛知淑徳大学の一五年』より）

＊

生まれ変わった一号棟は八階建て。四～五階は、来年度誕生する本学一〇番目の学部『食健康科学部』の施設が入り、五〇年目からの新たな発展に寄与していくことでしょう。

一～二階吹き抜けのホールには芝康弘さんの原画をもとに製作された陶壁画『君に読む未来』が飾られています。

大きな木の下で木漏れ日に照らされ、食い入るように絵本を見聞きする子どもたち。その絵本のタイトルは『パパお月さまとって』。

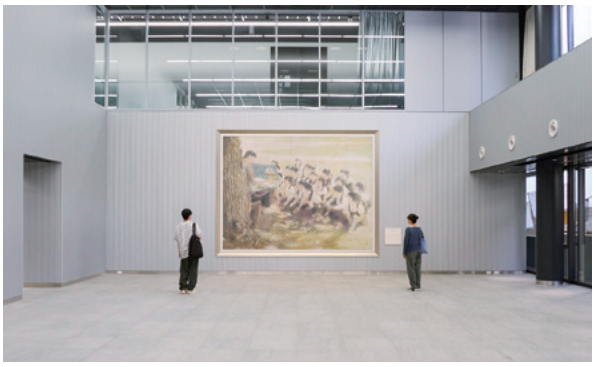
娘の願いをかなえるため、パパが長い長いはしごを高い山に運び取ってきた月は、娘が遊んでいるうちに消え、また空に現れる。というファンタジー。

子どもたち一人一人の個性ある愛くるしい表情、それと対照的な真剣なまなざし、そして、子どもたちを優しく包む光。

誰もが通った懐かしい原風景。

本学の学生達には、過去に思いをはせ、好奇心旺盛に今を過ごし、天の深みへ夢かかげて未来に向かってもらいたいと願ってやみません。

未来はためらいつつ近づき
現在は矢のように速く飛び去り
過去は永久に静かに立っている
（フリードリッヒ・シラー）



1・2階の吹き抜けのホールと陶壁画